

袁枚の女孫袁綬と滅びゆく随園：清嘉慶・道光期の 女流詩人の素描

蕭, 燕婉
中山医学大学 (台湾) : 助理教授

<https://doi.org/10.15017/13187>

出版情報：中国文学論集. 36, pp.72-86, 2007-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

袁枚の女孫袁綬と滅びゆく隨園

——清嘉慶・道光期の女流詩人の素描——

蕭 燕 婉

はじめに

清の乾隆期に中国国家の気象は隆盛の頂点に達した。この乾隆期に比類ない繁栄を極めた江南地方の女流詩人たちは、豊かな環境の中で多感な文学感性を開花させ、繊細優美なムードを漂わせる詩を数多く作っている。

しかし、嘉慶・道光年間へと時代が移るにつれ、全盛期の栄光は次第に衰えてゆく。国内では嘉慶白蓮教の乱、太平天国の乱をはじめとする諸反乱が発生し、更に国外からの圧力によるアヘン戦争の衝撃が加わると、清朝の支配には深刻な影響が及ぼすにはいられなかった。衰亡の前兆がしのびよる時代に、女流詩人の詩の風格や作詩の視点は、具体的にどのようになら変わったのか。清代の女流文学史におけるこの問題に関する認識は、まだ明確にされていない。

以上の問題を明らかにするために、本稿では、清嘉慶・道光時代に生きた袁枚の女孫・袁綬（字は紫卿、乾隆五十九年同治八年？）の著作を考察してみたい。袁綬は祖父袁枚が主張した性靈派の詩風を受け継ぎ、袁氏一族の輝かしい最後のページを飾った女流詩人である。著に『瑤華閣詩草』一卷、『瑤華閣詞鈔・補遺』一卷、『閩南雜詠』一卷がある。本稿では、まず彼女の独自の境涯や彼女の置かれた社会的背景の検討を通して、嘉慶・道光年間の女流詩人の作詩の特徴とその文学史上の意義を考えてみたい。また、袁綬の著作からは、彼女の誇りとしていた祖父袁枚の私邸隨園である「隨園」へ寄せる並々ならぬ追憶の情がよく窺われる。そこで、本稿では故園の没落をその目で見

た袁綬の著作を手がかりとして、随園盛衰の歴史や、袁枚が主張した性靈説の衰退についても探ってみたい。

一 袁綬と随園への思い

袁枚の家族の中に詩文を善くした女性はい少なくない。『袁家三妹合稿』は、袁枚の編集になる、彼の三人の妹袁機・袁棠・袁杼の詩集である。袁枚の女孫でも、袁綬のほか、袁嘉（柔吉、著に『湘痕閣詩稿』）、袁青（黛華、著に『燕歸來軒稿』）、袁姉（小芬、著に『靈齋閣詩』）などが風雅を好んだ閨秀として挙げられる。袁家はまさに女流詩人を輩出した一族と言えよう。

袁綬は袁通の娘で、南平（福建）知県呉国俊（伯鈞）の妻である。父袁通（字は蘭村）はもともと袁枚の弟袁樹の息子である。乾隆四十（一七七五）年、息子のなかつた袁枚は後継ぎとして、袁通を養子に迎えた。袁通は詞の作者として高く評価され、『捧月樓詞』二巻の作を残している。また、郭嚶、孫原湘、楊芳燦など嘉慶・道光期文壇の中心的な人物は、ほとんどその交友範囲内にあり、当時の文壇交流史を考える上でも重要な人物である。

夏愷が、袁綬の『簪雲閣詩詞集』序に、

簡齋先生、…所著小倉山房集、海内珍如拱璧、…蘭村先生、…所著捧月樓詞、予嘗誦之、…安人賦性穎異、髫髻時誦祖父詩、輒怡然意開、即能寄託韻事。研究倚声之学、蓋得於過庭之教深矣。

（簡齋先生、…著わす所の『小倉山房集』は、海内、珍とすること拱璧の如く、…蘭村先生、…著わす所の『捧月樓詞』は、予嘗て之を誦す、…安人（袁綬）は賦性、穎異にして、髫髻の時に祖父の詩を読めば、輒ち怡然として意開け、即ち能く韻事に寄託す。倚声を研究するの学は、蓋し過庭の教に得ること深ければなり。）

と述べている如く、祖父袁枚は詩、父親は詞を善くするという文学的な家庭環境で育まれた袁綬は、早くから詩詞に熱中するようになった。夫の呉国俊も詞に長じ、袁綬と文学的趣味を共有していた。嫁いだ三日後に、彼女は次のような初々しさの溢れる、若妻の可愛らしさを感じさせる詩を詠んでいる。

于歸後三日对鏡（2） 于歸ときて後三日、鏡に對す

曉起窓前整鬢髮 曉に起きて 窓前に鬢髮を整つ

画眉深淺入時難 画眉 深淺 時に入ること難し

鏡中似我疑非我 鏡中 我に似たるは 我に非ざるかと疑つ

幾度低徊不忍看 幾度か低徊して 看るに忍びず

二句目の「画眉深淺入時難」は、唐・朱慶餘「近試上張籍水部」詩の「粧罷低声問夫婿、画眉深淺入時無」（粧罷み、低声にて、夫婿に問う、画眉、深淺、時に入るやいな無やと。）を踏まえた表現である。

袁綬の著作に登場する唱和相手の多くは血縁關係のある人である。例えば、弟の袁祖惠、或いは前に触れた袁嘉、袁青、袁艸などの従姉妹たちである。「随園」の思い出を共有していた家族との絆はかなり深かったようで、結婚後の袁綬は、しきりに倉山のことを振り返っている。次に「春日回倉山作」（瑤華閣詩草）その二を引く。

面面青山入眼新 登臨妬煞詠花人 面面の青山 眼に入りて新たなり 登臨して 詠花の人に妬煞せらる

東風無力春雲懶 隄畔垂楊綠未勻 東風 力無く 春雲 懶し 隄畔の垂楊 綠 未だ勻しからず

この詩は随園で眺めた新春の風景を詠じている。二句目で彼女が「登臨妬煞詠花人」と誇示しているからには、一世を風靡した袁枚が亡くなってはいても、随園の栄光はまだ衰えていないと推測できる。故郷に帰るたびに、袁綬の随園に対する思慕の念は、なおさら深化することになったようだ。「倉山牡丹盛開家媼母招飲即席感賦」（瑤華閣詩草）には、かつて骨肉の弟妹たちと一家団樂した随園のことに深く思いを馳せ、空しく嘆いている彼女の姿が窺える。

1 陽春百花發 鼠姑擅盛名 陽春に百花ひら發き 鼠姑は盛名を擅にす

3 今春雨水遲 三月方含英 今春 雨水遅く 三月 方めて英を含む

5 嫣然倚東風 解語真傾城 嫣然として東風に倚り 解語 真に傾城

7 主人開瓊筵 邀客吹金笙 主人 瓊筵を開き 客を邀えて金笙を吹く

9 行樂貴及時 相与各尽觥 行樂 時に及ぶを貴び 相与に各おの觥を尽くす

- | | | | | | | |
|----|-------|-------|--------------|--------------|------------|------------|
| 11 | 長歌發慷慨 | 所愁節序更 | 長歌 | 慷慨を發す | 愁うる所は | 節序の更まることなり |
| 13 | 年時携手伴 | 落落如晨星 | 年時 | 携手の伴は | 落落として晨星の如し | |
| 15 | 骨肉多遠別 | 踽踽難為情 | 骨肉は多く遠く別れ | 踽踽として情を為し難し | | |
| 17 | 身遙心自近 | 夢想通精誠 | 身遙かなるも | 心自づから近く | 夢想 | 精誠に通ず |
| 19 | 豈無魚與雁 | 奈此千里程 | 豈に魚と雁と無からんや | 此の千里の程を奈せん | | |
| 21 | 温涼叙片紙 | 離懷難尽傾 | 温涼 | 片紙に叙ぶるも | 離懷 | 尽傾し難し |
| 23 | 歲月日以去 | 憂思日以盈 | 歲月 | 日に以て去り | 憂思 | 日に以て盈つ |
| 25 | 願附飛鴻翻 | 乘風以北征 | 願わくは飛鴻の翻を附して | 風に乗じて以て北に征かん | | |

第一句目から第六句目までは、堂々たる随園は昔と変わらせず、春になると牡丹が咲き誇っている様子を描写する。第七句目から第十句目は、春の酒宴の賑やかなさまを述べる。第十一句目から筆鋒は一転し、第十八句目までは時間の推移や境遇の変化に伴い、若い頃一緒にいた兄弟と離れ離れになった悲しさを訴える。第十九句目から最後までは、兄弟を慕う離別の情はつもの一方であり、風に乗って兄弟に会いに行きたいという願望を強く吐露している。袁綬が故郷倉山に触れるときには、骨肉団圓、共に詩詞を吟じた昔の暖かさ、詩酒の宴が果て、人が散じて後の今の寂しさを強く対比する描写が目立っている。このような随園での一家団圓の楽しい思い出と、世の移り変わりへの嘆きが交錯する詩句を彼女の詩集からひろってみると、また以下のような例を取り上げることができる。

帰寧二三月、膝下多歡娛、…河梁一為別、懷抱鬱不舒、…倉山好烟景、咫尺空踟蹰。

(帰寧すること二、三月、膝下に歡娛多かりき、…河梁、一たび別れを為してより、懷抱、鬱として舒びず、…倉山の好烟景、咫尺、空しく踟蹰す。)(『瑤華閣詩草』「題少蘭弟倉山憶旧図」)

倉山雪後烟景佳、開筵折簡邀綵伴、謝庭詠絮傾同儕、錦片華年彈指過、…當時座上分韻人、落落星晨存幾個。
 (倉山、雪後の烟景佳く、筵を開き簡を折りて綵伴を邀つ、謝庭の詠絮、同儕に傾き、錦片の華年、彈指に過

袁枚の女孫袁綬と滅びゆく随園

く、…当時座上分韻の人、落落たる星晨、幾個か存す。）

（『瑤華閣詩草』「望雪歌」）

一方、袁綬の従姉妹袁嘉の『湘痕閣詩稿』には、『花朝倉山即事與黛華、潤如、紫卿、小芬、儀吉諸姉妹同賦』、『隨園消暑與竹畦起一尺、少蘭祖惠、小村祖惠兩弟、黛華、潤如、紫卿姉分賦得鶴橋步月』という詩題が見られる。紫卿は即ち袁綬である。これらの詩題を見ると、花朝節などの祝日に、袁綬が数人の兄弟と隨園で親しく交わりながら、文雅な催しを楽しんでいた様子を思い浮かべることができよう。恐らく袁綬にとって、隨園の倉山は単なる空間中の一領域ではなく、親戚一同が集まって賑やかに詩詞の会を繰り広げる、かけがえない団欒の場なのであった。つまり、故鄉隨園は、彼女の兄弟と完全に一体化した心理表象として、袁綬の詩詞の中で繰り返して確認されているものだと言えよう。

二 閩南で詠じた詩

道光二十（一八四〇）年、袁綬は夫に従って、遠く福建省（閩南）の任地に赴いた。福建省は、南京の隨園とは、氣候、地理、言葉などがありにも異なっていた。閩南に来たばかりの袁綬は、懐かしい故郷のなまりを聞くことのできない、不慣れな土地での生活への嘆きを、『閩南寓館雜感』（閩南雜咏）その四で、次のように述べている。

閩南蛮語訳難通

閩南の蛮語は 訳するも通じ難し

入境都成有耳聾

境に入れば 都て耳聾有るを成す

俗陋民頑官似鼠

俗は陋 民は頑にして 官は鼠に似たり

價高市小婦猶狨

價は高く 市は小にして 婦は猶お狨のごとし

閉門何異居空谷

門を閉ざせば 何ぞ空谷に居るに異ならん

面壁真同住梵宮

壁に面せば 真に梵宮に住するに同じ

詩酒緣疎知己隔

詩酒の縁は疎にして 知己は隔たる

故郷疑在五雲中 故郷 疑うらくは 五雲の中に在るか

この詩の前半で袁綬は、福建省の（彼女にとっては）異様な風俗と、その社会問題を平俗な言葉で描き出し、後半では、常に故郷と親友を忘れることのできない心情を吐露している。

袁綬の弟袁祖惠が著した「瑤華閣詩草序」には、「憶庚子歲、余西走蜀。姐偕伯鈞亦相繼東走閩。凡夫山水之奇險、風雨冰霜之勞苦、宦途世路之崎嶇、余習嘗之、姐亦習見之。其發之為詩詞之妙也、亦固其宜。（憶う、庚子の歲、余、西のかた蜀に走る。姐、伯鈞と偕に、亦た相繼いで東のかた閩に走る。凡そ夫の山水の奇險、風雨冰霜の勞苦、宦途世路の崎嶇は、余習いて之を嘗め、姐も亦た習いて之を見る。其の之を發して詩詞の妙を為すや、亦た固より其れ宜なるかな。）」とある。袁綬は江蘇省の南京から福建省までの経路で、山を跋み水を涉り、大変な苦勞を嘗め尽くした。しかし、これによって彼女の視野は一段と広がり、創作能力を十分に發揮する機会が与えられたのだった。

更に、時あたかも、列強の侵攻や民変の激発によって、清朝の支配は動搖期に入っていた。袁綬が閩南に着いた道光二十年にはアヘン戦争が勃発している。福建省はアヘン戦争の舞台にこそならなかったものの、間接的に聞き知った戦争の実態は、彼女の心を少なからず刺戟したようである。こつして袁綬は、当時の一般女性の限界を打ち破つて、時局に対する深い懸念を表明した詩を次々と作つていった。例えば、『閩南雜咏』に「閩道」十首を収めているが、その一では、

閩道夷烽警 江南已戒嚴 聞くならく 夷烽を警し 江南 已に戒嚴すと

不知天下士 智勇是誰兼 知らず 天下の士 智勇 是れ誰か兼ねる

と詠じる。江南は英国からの侵略を受けたが、それを撥ね返すだけの智慧と勇氣を兼ね備えた国土が、果たして存在するのかわかという問いかけからは、彼女の心を憂える気持ちも十分に窺える。その二では、

戰守無長策 攻心乏將才 戰守 長策無く 心を攻むるに 將才乏し

如何趙充国 此日欲懷來 如何ぞ 趙充国 此の日 懷來んことを欲す

と述べる。趙充国は漢、上邽の人、武帝の時、匈奴を撃つて戦功があった。更に論策に長じ、その上書は皆経世の

名文とされる文武兼備の名将であった（『漢書』卷六十九）。この詩は、漢代の名将趙充国に対する想いを述べることで、朝廷の官吏任用が当を得ていないことを責めたものである。また、その四には、

謬忝金張位 難分宵旰憂 謬りて金・張の位を忝くし 宵旰の憂いを分かち難し

愛財兼惜死 何以慰宸旒 財を愛し 兼ねて死を惜しむ 何を以てか 宸旒を慰めん

とある。左思の「詠史詩」に「金・張は旧業に藉りて、七葉 漢貂を珥さしはむ」とあるように、金・張とは、漢の金日磾と張安世を指す。二人は共に漢の宣帝に仕えて、権勢を縦にした貴族である。宸旒とは天子の冠のたれ、転じて、天子の意である。彼女は清の天子に深い同情を寄せると共に、外国の侵略という非常事態を前にしながら、国家という「公」よりも私利私欲を優先させ、我が身の保身のみに汲々としている官吏の醜態を指弾している。

アヘン戦争が起こつてから、清朝がイギリスに屈服し、南京条約に調印するまで約二年間を費やしたが、この間、政治情勢に強い関心を持つ袁綬は、冷徹な記録者の視線を感じさせる「時事」（『閩南雜咏』）の中に、無能な官吏に對する不満や時世への悲憤を詠み込んでいる。

兩載夷氛擾 連營海上難 兩載 夷氛擾たり 營を連ね 海上に難あり

鉄衣霜月冷 金柝曉風酸 鉄衣 霜月冷たくして 金柝 曉風酸たり

不戦軍民遁 無功将相慙 戦わずして 軍民遁れ 功無くして 将相慙ず

妖星猶閃爍 露布幾時看 妖星 猶お閃爍たり 露布 幾時か看ん

「鉄衣霜月冷、金柝曉風酸」は、『樂府詩集』「木蘭詩」に「朔氣伝金柝、寒光照鉄衣」（朔氣、金柝に伝わり、寒光、鉄衣を照らす）とあるのを踏まえた表現である。「露布」は捷書の別名である。第五句目の「軍民遁」と第六句目の「将相慙」は対句であり、軍隊と將軍の恥ずべき醜態を暴露している。最後の明滅する妖星とは、イギリスの氣勢がまだ完全には衰えていないことを喩えたもので、人々の警戒心を喚起しようとする狙いが読み取れる。

以上見てきたように、閩南に到着してからは、時世の転変によって、袁綬の詩の作風は、個人の優美可憐な叙情から、次第に国運への危機感、そして緊迫感に富んだ、憂憤の調に変わっていったことが分かる。これらの詩は、歴史的背景及び社会に深い関心を寄せる女流詩人としての自覚を抜きにしては、生まれ得なかつた作品であろう。

三 滅びゆく隨園

清がアヘン戦争（二八四〇）四二・アロー戦争（二八五六〜六〇）といった対外的な問題で苦しんでいる間に、国内では太平天国の乱（二八五一〜六四）が勃発した。咸豐三年（二八五三、癸丑）三月、太平天国軍が南京を占領し、嘗て袁綬の親しい詩友でもあった従姉妹袁嘉（柔吉）と袁青（黛華）は、戦乱の中で殉難した。袁嘉の『湘痕閣詩稿』に王榮昌の「崇節母伝」が収められているが、その中では袁嘉の悲劇的な最期について、次のように語られている。

節母姓袁氏、名嘉、字柔吉。……、癸丑春、盜破金陵。乃仰天太息、謂一生鶯獨守節、命也。即死節、亦命也。投池水淺不死、服阿芙蓉、喘二日乃死。嗚呼烈矣。同時隨園眷屬死者衆、而節母為尤慘。（節母、姓は袁氏、名は嘉、字は柔吉。……、癸丑の春、盜、金陵（南京）を破る。乃ち天を仰ぎ太息して謂えらく、「一生鶯獨にして節を守るは、命なり。即ち節に死するも、亦た命なり」と。池に投ずるも水浅くして死せず。阿芙蓉アヘンを服し、喘すること二日にして乃ち死す。嗚呼、烈なるかな。時を同じくして隨園の眷屬に死する者衆きも、而も節母尤も惨なりと為す。）

福建省にいた袁綬は従姉妹の死を聞くと、たくましい描写力で「哭柔吉妹死金陵失守之難」（『閩南雜咏』）という五十三句からなる長篇を書き上げた。その中には、太平天国の乱によって無残な廢墟と化した南京と、死に追いやられた妹袁嘉を悼む心情が綴られている。（以下各句の上に付した数字は通算の句数であり、一部は省略している。）

- 1 金陵城頭陣雲黑 金陵城頭 陣雲黒く
- 2 城中万姓無人色 城中の万姓 人色無し
- 3 礮声如雷城不守 礮声は雷の如くして 城守られず
- 4 賊已入城何処走 賊は已に城に入る 何れの処にか走げん
- 5 乱殺軍民不住手 軍民を乱殺して 手を住めず
- 6 家業蕩為賊所有 家業 蕩として 賊の有する所と為る

袁枚の女孫袁綬と滅びゆく隨園

- 7 少壮擄去冲前鋒 少壮は擄去して 前鋒に冲せられ
 8 婦孺驅来入女館 婦孺は驅り来りて 女館に入れらる⁽¹⁰⁾
 9 打柴負重筋骨断 柴を打ち 重きを負い 筋骨断つ
 10 食不充飢贖残喘 食は飢を充たさず 残喘を贖す^{あま}
 11 両載断消息 両載 消息断えて
 12 未卜君存亡 未だ君の存亡をトせざるに
 13 詎知君早殉此難 詎^{いか}んぞ知らん 君早く此の難に殉ずるを
 14 不覚雨泣沾衣裳 覚えず 雨のごとく泣きて 衣裳を沾す^{つゝ}
 15 人生不幸墮女身 人生 不幸にして 女身に墮するも
 16 遭際未若君遭逆 遭際 未だ若かず 君の遭逆には
 17 十七于帰未八載 十七にして于に^こ帰ぎ 未だ八載ならずして
 18 傷心已作未亡人 傷心 已に未亡人と作る
 19 上有戚姑下有稚子 上に戚姑有り 下に稚子有り
 20 生不能生死不可死 生くるに生くる能わず 死するに死すべからず
- 第一句目から第十句目までは、金陵（南京）の町は荒らされ尽くし、至る所に太平軍が充滿し、略奪殺戮をほし
 いままにしていた様子、及び家族と離散し、飢饉に喘ぐ人々の苦痛の叫びを描いている。第十一句目から第十五句
 目までは、袁嘉の殉死の知らせを聞いた悲しみを吐露している。第十六句目から第二十句目までは、結婚して八年、
 二十五歳にして寡婦となり、舅姑と子供がいたため節婦の道を歩んだ、憂苦に満ちた袁嘉の人生を振り返っている。
 これに続く省略部分は、苦境に立ち向かいながら子供たちを教育したが、不幸にも子供たちも相次いで亡くなった
 という、袁嘉の孤独な生涯を追憶した重い描写である。詩の最後には、

48 軍声動地黄巾来 軍声 地を動かして 黄巾来たる

49 鋒火叢中幾人活 鋒火叢中 幾人か活きん

50 嗚呼此時一死重泰山 嗚呼 此の時 一死は泰山よりも重し

51 夜台骨肉悲團欒 夜台 骨肉 團欒を悲しまん

52 定知揮淚語夫子 定めて知る 淚を揮いて 夫子に語るは

53 三十三年苦節難 三十三年 苦節の難

とある。「此時一死重泰山」と言っているのは、袁綬が、女性としての苦節に耐えて生きた袁嘉の最期に、積極的な評価を下したものである。

また、『隨園瑣記』に収められている袁枚の孫袁祖志の序文に「逮癸丑春、粵匪陷城、園亦隨燬」（癸丑の春に逮び、粵匪、城を陥る。園も亦た隨いて燬かる）とあるように、咸豐三年の春、隨園は太平天国の乱によつて破壊され、隨園の龐大な蔵書も、戦火によつて全部が灰燼に歸した。

更に、太平天国の乱に呼応して、秘密結社「小刀会」が上海で武装蜂起した。上海の知県となつた袁綬の弟袁祖惠は果敢に鎮圧しようとしたが、不幸にも賊に刺され、壮烈な死を遂げた。『清史稿』卷四百九十一「忠義五」に「袁祖惠、字又村、浙江省錢塘人。…粵匪據江寧為偽都、人心益搖。於是小刀会起事。小刀者、即無賴游民所結合。咸豐三年八月…、祖惠肅衣冠出、賊蟻擁入署。…首犯祖惠、刃交於胸、被十餘創、罵不絶口、死。（袁祖惠、字は又村、浙江省錢塘の人。…粵匪、江寧（南京）に據りて偽都と為し、人心益ます揺らく。是に於て、小刀会、事を起す。小刀とは、即ち無賴の游民の結合する所なり。咸豐三年八月…、祖惠、衣冠を肅して出づるに、賊、蟻のごとく擁して署に入る。…首めに祖惠を犯し、刃、胸に交わり、十餘の創を被るも、罵り口に絶えずして、死す。）」とある。

血なまぐさい風雲をはらむ騒乱の中で世を去つた袁祖惠の死を知つて、袁綬は「得又村仲弟著上海令殉難訃音詩以哭之」（『閩南雜咏』）三首を作り、弟の殉職を悼んだ。三首のうち第三首を掲げる。

痛亟還思未別前 痛み亟まり 還お思う 未だ別れざる前

小倉山下好林泉 小倉山下の好林泉

坐来花月供吟醉 坐来 花月 吟酔を供し

袁枚の女孫袁綬と滅びゆく隨園

行処楼台聴管絃 行処の楼台 管絃を聴く

離緒忽縈千万縷 離緒 忽ち縈わる 千万の縷

郷心已折十三年 郷心 已に折る 十三年

故園慘被黃巾陷 故園 慘として 黃巾に陥れらる

何日招魂葬墓田 何れの日に 魂を招き 墓田に葬らん

この詩から見ると、袁綬にとつて、若年の頃、小倉山房の林泉や楼閣で兄弟と共に詩詞を詠じた甘美な思い出は、現在の故郷への思慕や、不安な時局に対する憂いと切り離せないものだったと思われる。見るかげもない荒廃にさらされた随園、及び随園での温かい記憶を共有する袁綬の兄弟が、混乱のさなかにそれぞれ壮絶な最期を遂げたという無惨な事実を知ることによって、彼女は時代の苛酷な現実を、更に明確に認識することができたとも言えよう。というのは、彼女の家族と故郷を喪失した心情を述べた詩は、無限の悲しみに溢れているばかりでなく、時代の暗黒面をそのままリアルに照らし出すことにも成功しているからである。

おわりに

以上、袁枚の女孫・袁綬が生きた時代——特に清王朝を揺るがせた幾つかの事件——に視点を据えつつ、随園や兄弟に関わる彼女の詩を見てきた。『瑤華閣詩草』は、その殆どが道光二十年以前の作と見られるのに対して、『閩南雜咏』は、道光二十年から咸豊八年まで、袁綬が福建省で過した十八年間の作と考えられる。¹²⁾

『瑤華閣詩草』を繙くと、まず、日常生活の中での自然への思いや、感傷、身近な出来事、兄弟や親戚との交流などを素材とした、私的感情を歌った作品が多いという印象を受ける。しかし、道光二十年に勃発したアヘン戦争を契機として、袁綬の詩は、家族生活のひとつまひとつまを繊細な感覚で綴るといふ狭い枠を突き破っていく。そして、随園の働き運命や、争乱に巻き込まれ相継いで命を落した兄弟たちの悲劇の数々を通して、袁綬の詩の視点は、純粹な私的感情の領域から、次第に時勢や現実社会へと向うようになった。このように彼女の眼が家庭以外の

世界へと開かれていく過程を反映した作品は、殆どが『閩南雜詠』に収められている。

袁綬の著作の検討を通して、国の危機が迫りつつあった時代の下で、女流詩人も歴史意識を自覚めさせられ、女性独自の視点から、社会の不安を文学作品に反映させようと試みていたことが分かった。勿論、嘉慶年間の女流詩人のうち、国家衰亡前夜の深刻な状況を鋭く詩に描き出したのは、けっして袁綬だけではなかった。

それは詩だけのことではない。アヘン戦争が最も激しい様相を呈していた道光二十二年（一八四二）年六月、閩秀詩人沈善宝（一八〇二—一八六二）と張縉英（一七九二？）は、凜然として国勢を論じ合った後、共に一首の詞を完成させた。このエピソードは、沈善宝の『名媛詩話』巻八に次のように記録されている。なお（ ）の部分は筆者注である。

壬寅荷花生日、余過淡菊軒時、孟緹初病起。因論夷務未平、養癰成患、相对扼腕。出其近作念奴嬌半闕、云後半未成、屬余足之。……。良辰易誤、尽風風雨雨、送將春去。蘭蕙忍教摧折尽、曠有滿空飛絮。塞雁驚弦、蜀鶻啼血、縉是傷心処。已悲衰謝、那堪更聽鞞鼓。聞說照海妖氛、沿江毒霧、戰艦橫瓜步。銅砲鉄輪雖猛捷、豈少水師強弩？壯士衝冠、書生投筆、談笑擒夷虜。妙高台畔、蛾眉曾佐神武。

壬寅の荷花生日（一八四二年六月二十四日）、余、淡菊軒（張縉英の書齋）に過ぎりし時、孟緹（張縉英は字、孟緹）初めて病より起く。因りて夷務未だ平らかならず、癰を養いて患を成すを論じ、相對して扼腕す。其の近作たる念奴嬌半闕を出し、後半未だ成らずと云いて、余に之を足さんことを屬す。……。良辰誤まり易く、尽く風風雨雨にして、春を送り將き去る。蘭蕙は忍くも摧け折れ尽くさしめ、滿空の飛絮有るを曠すのみ。塞雁は弦に驚き、蜀鶻は啼血して、縉て是れ傷心の処なり。已に衰謝を悲しむに、那んぞ更に鞞鼓を聴くに堪えんや。

（ここまで張縉英の作）聞くならく、海を照らす妖氛あり、江に沿う毒霧ありて、戰艦、瓜步（瓜步山、江蘇省にある）に横たわると。銅砲鉄輪、猛捷なりと雖も、豈に水師の強弩を少かんや？ 壯士は冠を衝き、書生は筆を投じ、談笑して夷虜を擒にす。妙高台の畔、蛾眉曾て神武を佐く。（ここまで沈善宝の作）

張縉英の書いた詞の前半は、忠義の土が犠牲となった甲斐もなく、イギリスの軍隊が長江に迫りつつある緊張した状況を反映するものである。沈善宝が書いた後半部の「妙高台畔、蛾眉曾佐神武」とは、南宋・韓世宗の妻の梁

紅玉の事跡を踏まえた表現である。韓世宗が金軍と黄天蕩（南京市の東北）に戦った時、梁紅玉は自から桴たづをとり、鼓を打って、夫を助け、金軍を敗走させたと言われる。ここには、勇気を奮って敵と戦うよう女性たちを励まそうとする沈善宝の苦心が窺われる。

かくのごとく、嘉慶・道光の女流詩人の活躍と、その政治に対する姿勢は、常に積極的に社会に関わるうとした乾隆期の女流詩人の存在の延長線上にあったと言える。

袁綬の創作は、個性の表現を重んずる袁枚の「性靈説」を継承したものである。⁽¹⁶⁾ 自由活発な性情の吐露を尊重する「性靈説」は、清代の乾隆期に台頭した富裕な平民層によつて支えられていた。しかし、国運衰退著しい同治・光緒年間になると、知識人の沈鬱な思索を詩に表現せんとした「同光体」が、乾隆の盛世に風靡した「性靈説」に取って代わつた。乾隆と同治の間である嘉道年間に書かれた袁綬の詩には、家族に対する清婉柔美の情を吐露した詩もあれば、アヘン戦争下の状況を反映し、不安な時代を憂えて悲痛な感情の高まりを見せる詩もあつた。このように時代背景や題材に応じて詠みぶりが変わる幅広さも、彼女の特色であり、その詩才の高さを示すものと言えよう。

ここで随園の盛衰の跡を振り返つてみよう。乾隆十三年（一七四八）、袁枚は南京で随園を購入し、翌年、弟の袁樹と甥の陸建を連れて随園に居を移し、五十年近くを随園で過ごした。堂々たる随園の邸宅には庭園の趣が凝らされ、夥しい賓客が常に入出入りし、名士才媛たちが詩酒徵逐の日々を送っていた。しかし随園は創建から約百年後の咸豐三年（一八五三）、太平天国の乱によつて廃墟と化した。かつての雅集の舞台も消え逝く運命を遁れることはできなかつた。後に南京出身の文人陳作霖（一八三七—一九二〇）は、先達としての袁枚を強く意識し、その旧居を訪れている。彼は「尋小倉山随園故址」（可園詩存 卷二十三）で、「……我来訪旧遠崖行、吠客猎猎村犬横、牽袂荒榛徑外纏、礙鞵野筍泥中迸……」（我れ旧を来訪するに崖を遶りて行く、客に吠ゆること猎猎として村犬横たわる、袂を牽く荒榛は徑外に纏わり、鞵を礙うる野筍は泥中より迸る）と、荒れ果てた随園の物寂しいさまを描写している。

混乱をくぐり抜け生き延びることができた袁綬は、袁枚との血脈に連なる自分を強く意識していたであろう。だからこそ彼女は詩の中に、祖父が築き上げ誇りとしていた随園の盛衰をできるかぎり記録したのであつた。またそ

の内容は、随園で深い絆によって結ばれた親戚への思いと絡み合ってもいた。

袁枚の女孫・袁綬の文学が、長い歴史上の閑却から見直されて、蘇る日はもはや来ないかもしれない。しかし、アヘン戦争前夜から近代へと移り行く動乱の中を生きた一人の女性の記録として、ひいては輝かしい随園が幕を閉じるまでの経緯を探る資料として、袁綬の著作の文学的価値は、やはり再認識されてもよいのではあるまいか。

注

- (1) 哈佛大学燕京図書館所蔵の『瑤華閣詩草』一巻、『瑤華閣詞鈔・補遺』一巻、『閩南雜咏』一巻は清同治六年（一八六七）の刻本である。本稿で使用したテキストは、清宣統二年（一九一〇）陝西図書館排印本である。
- (2) 陳文述の女弟子錢守璞の『繡佛樓詩稿』巻二「題袁紫卿夫人詩稿」に「小倉山色好、空翠筆端収」とある。錢守璞は袁綬の著作を読み、彼女の随園に関わる詩から強い印象を受けていたのだらう。
- (3) 袁嘉、袁青、袁坤の著作については胡文楷『歷代婦女著作考』巻十三「清代七」を参照（上海古籍出版社 一九八五年）。
- (4) 『捧月樓詞』巻一に郭慶、孫原湘の「信宿隨園、頗極文謙之案、將歸之夕、蘭村以秋夢樓函索題、黯然賦此」詞が付されている。また、同巻一に袁通「楊蓉裳先生芳潔招集芙蓉山館、分詩牌限調填各詞、得一闋」詞が見られる。
- (5) 胡文楷『歷代婦女著作考』（上海古籍出版社 一九八五年）には、『簪雲閣詩稿』という袁綬の著作は記されていない。『瑤華閣詞補遺』に付された吳廷錫の後跋には「先祖母瑤華閣詩草二巻、詞鈔一卷、初名簪雲閣詩稿」とあるから、いま見られる袁綬の著作『瑤華閣詩草・詞鈔』は、最初は『簪雲閣詩稿』と名付けられていたと推測される。
- (6) 丁紹儀は『聽秋声館詞話』巻十一に「江寧吳伯鈞大令國俊、…学有師承、…没後、其子師曾曾始以全稿見示。」と述べた後、吳国俊の詞を幾つか取り上げている。また、徐世昌『晚晴移詩匯』巻一八七には「袁綬、…歸吳氏、極夫婦唱和之樂。」とある。
- (7) この詩は梁乙真『清代婦女文学史』（台湾中華書局 一九七九年）第二編 第四章「袁枚與婦女文学下」から引く。

- (8) 蒋敦復『随園軼事』「随園興廢之感慨」に「先生故後、蘭村、真来二公子、敬承先志、随園中之器用玩物、图画彝鼎、靡不珍而重之、而亭台池館、花木竹石、又時加修補、是以五十餘年、風景如新。」とある。
- (9) 袁祖志『随園瑣記』卷下「記寇乱」に「癸丑春、金陵失陷、時堂姐柔吉、族姐黛華同時仰藥死。」とある。
- (10) 女館に關しては「中国思想文化事典」「女子・清末の転換」に「初期の太平天国軍は男女分離政策をとり、進軍中は男營・女營に分け、都市を占領すると、男館・女館を設立して住民を收容し、夫婦といえども同宿することは許さなかつた。これは家族を一時的に解体するものであつた」という説明がある。(溝口雄三・丸山松幸・池田知久編 東京大学出版会二〇〇一年)
- (11) 袁祖志『随園瑣記』卷下「記寇乱」に「園林遭燬、而所藏之三千万卷書籍、及名人筆墨図冊額聯、並小倉山房全集三十種之板、均付劫灰。」とある。
- (12) 『閩南雜咏』に収められている最後の二首目の詩「赴晉就養、迂道至滬上省母、示六弟詩」その二に「一別閩山隔、依違十八年。」とある。袁綬は福建省に滞在して十八年後に息子に山西省に迎えられたが、途中で母親のご機嫌をうかがうために、上海に帰省した。
- (13) 例えば、『清詩紀事』「列女卷」に陳蘊蓮は「閩寧波警」では、道光二十年に起こつたアヘン戦争のことに触れて、次のように詠っている。「伝来消息浙川東、聞道樓船一炬空。(総兵鄭国鴻、子鼎臣、設計燒毀夷船數隻、賊始退至定海。)果使逆夷真破胆、也忝韓范在軍中。」
- (14) 『清史稿』「宣宗紀」に「二十二年、…六月、癸巳英船寇京口、丙申英船寇鎮江、…丁酉英人陷鎮江、副都統海齡死之。」とある。
- (15) 沈善宝は浙江省錢塘の人。著に『鴻雪樓初集』四卷、『名媛詩話』十二卷がある。彼女は『名媛詩話』の中に積極的に女性の詩を収集し、女性の文学的才能を表彰しようと尽力した。張縉英は江蘇省陽湖の人。著に『澹菊軒初稿』四卷・詞一卷、『国朝列女詩略』がある。彼女は張琦の長女であり、張琦は「常州派」の詞を起こした張惠言の弟である。張縉英の母湯瑤卿、妹縉英、綉英、綉英はすべて女流詩人である。
- (16) 徐世昌『晚晴簃詩匯』卷一八七に「随園諸女孫、并耽風雅、瑤華詩詞尤工、…其詩原本性靈、意無不達。」とある。